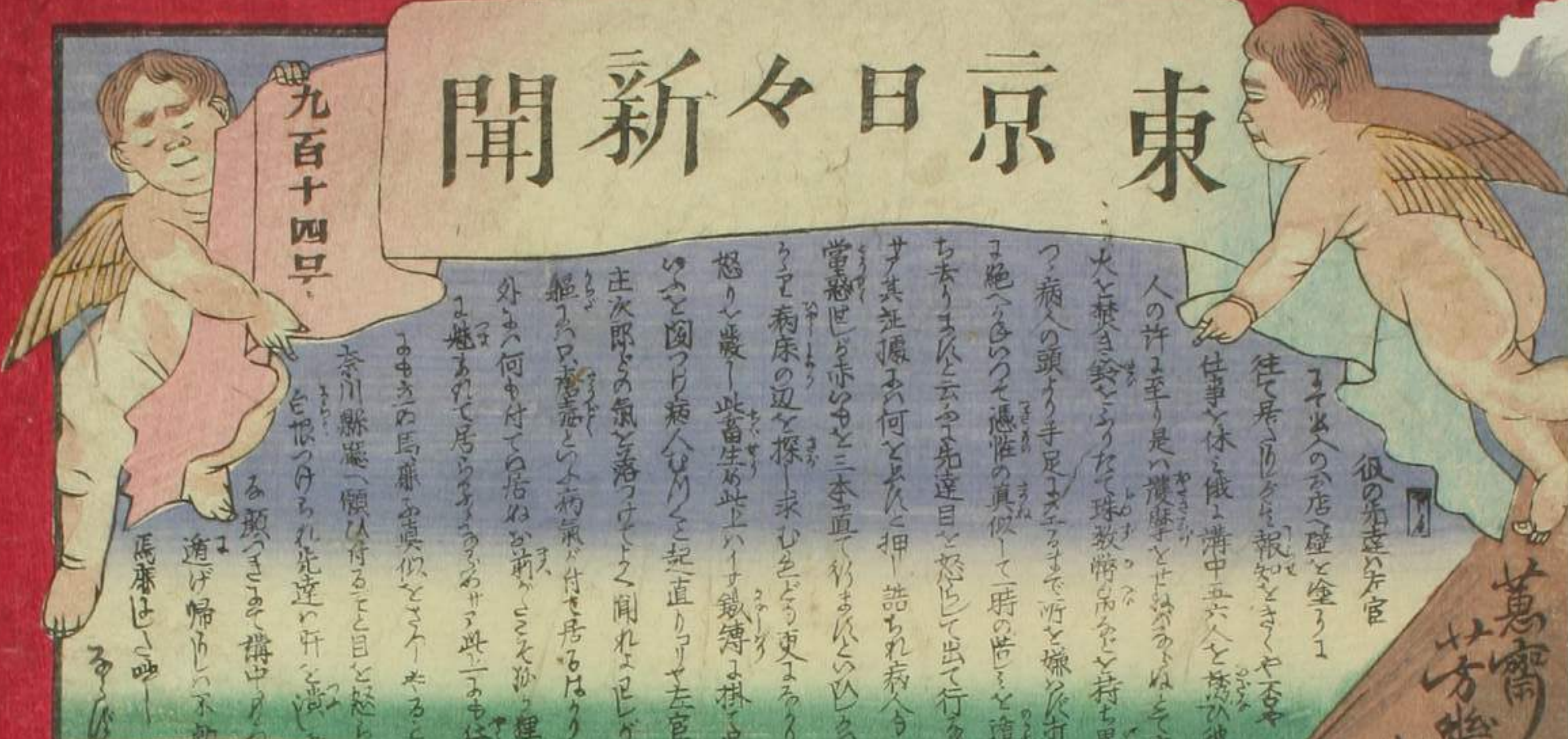


東京日々新聞

九百十四号



彼の病室の左官

萬齋
廿方變
草

往居りしを報知せしや否や
仕事と休は俄に溝中五六人を誘ひ彼ら病
人の許に至り是は獲摩とせしめ病の世に盛ん
火と焚き給ふやうな珠教幣帛を所持し異口同音に眞言を唱へ
つ病人の頭より手足より汗を流し病を叩けい病入る苦痛
は絶へぬのて憑性の真似して一時の苦とて遣ふと思入速に立
ち去りて云や先達目と怒じて出て行々先達と立
サ其証據は何と云ふに押 詰られ病入も
當惑せし赤い巾と三本直ぐはもふの以て皆く一同立
ろと病床の辺を探し求むるより更なるけき先達又
怒りて嚴し此畜生が此上い針鐵縛り掛れ真ん
いと困り病入むりと起直りて左官
主次第の氣と落つてと之聞れは已レが
軀の口蓋蓋といふ病氣が付て居るはうり
外も何や付て居るが前かこもはうり
は地をたて居るはうりは此上い針鐵縛り掛れ
はもとの馬車も真似とてとてとてとて
奈川縣憲一顧ひ付ると目と怒りて
台根ついたら先達の汗を流し持てゆ水
る顔ついたら構はらぬもこりこり
逃げ帰りの不効
馬車はこり
るわ



積浪元町の向某の病室にて撰り筆
既三年の久しきよ
及いし此の病室の
強き故に只訳の
き諸活を病室に
折らりてと室内
の苦とも聞つて是の
全人
感傷
のももも
らるる百四
町辺に住
る人の病
を御救
濟の先
達の丹心
行其次第
を以て
頼る

